

令和5年度 教員地域貢献活動支援事業（学長裁量事業）

地域実践研究 成果報告書

1 研究課題名

未来につなぐ持続可能な街を目指した「ファンづくり」

:領域横断的アプローチによる地域連携の実証研究

2 研究代表者

| | |
|----------|-----------------|
| 氏名・所属・職位 | 柴田 典子・国際商学部・准教授 |
|----------|-----------------|

3 チーム構成

| | |
|----------|--------------------------|
| 氏名・所属・職位 | 有馬 貴之・国際教養学部・准教授 |
| 氏名・所属・職位 | 陳 礼美・国際教養学部・教授 ※R5年度前期まで |
| 氏名・所属・職位 | 黒木 淳・国際商学部・准教授 |

学生の協力者（代表）

| | |
|----------|-----------------|
| 氏名・所属・学年 | 徳増 伶太・国際商学部・4年生 |
|----------|-----------------|

4 連携相手先

| | |
|-----|--------------|
| 組織名 | 横浜中華街発展会協同組合 |
|-----|--------------|

※連携相手先以外で、本事業に協力した・参画した機関等（該当がある場合記載）

| | |
|-----|--|
| 組織名 | |
|-----|--|

5 この研究活動の概要

日本最大かつ東アジア最大の中華街である横浜中華街を対象として、持続可能な街づくりを目指した多面的な「ファンづくり」のあり方を検討し、実証研究を行う。国際商学部、国際教養学部の4ゼミでチームを組み、マーケティング、観光、消費者行動、高齢者福祉、会計による領域横断的な研究体制を構築し、横浜中華街発展会協同組合と連携して取り組む。方法としては、データ活用による統計的アプローチと質的研究アプローチを行う。地域との連携および領域横断的アプローチによる相乗効果とソーシャル・イノベーション創出の機会となることが見込まれる。

6 この研究を実施する目的

[本研究テーマとなる地域課題の背景]

日本と中華の人々が協力して作った街である横浜中華街は、1980年代頃から観光地化が進み、全国から多くの観光客が訪れる街である。横浜中華街発展会協同組合は、横浜中華街が持続的に発展できるよう、街としての在り方について1990年代半ばから取り組んでおり、観光地としてだけでなく、経済、生活文化、地域創生など地域経済を担う存在として街の発展に尽力している組織である（横浜中華街発展会協同組合理事長高橋伸昌氏 2022年1月17日講演資料）。

横浜中華街はビジョンとして、①持続可能な社会と経営を実現するため、街と個店の利益と価値を向上させる「共創まちづくり」、②みなとみらい地区など近隣地域との連携強化による地域活性化を掲げている。その一環として横浜中華街発展会協同組合では、「中華街を大好きな人々を中華街の外に作りたい」、「将来につながるファンづくりを、地域の大学生とともに取り組みたい」との意向を持っていたことから、2021年度に「ヨコイチ×横浜中華街プロジェクト」を立ち上げた。本プロジェクトは、国際商学部の柴田典子、黒木淳、国際教養学部の有馬貴之、陳礼美の2学部4名の教員とゼミ生で構成した。

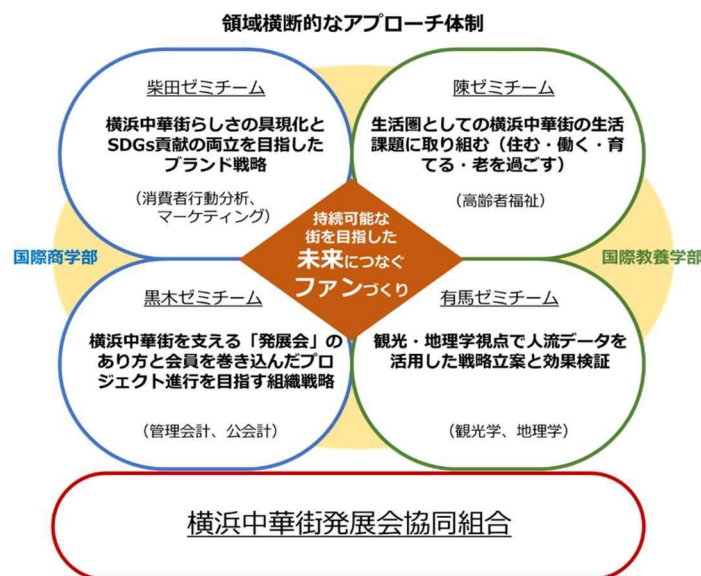


図 1 領域横断的なアプローチ体制

[この課題に取り組む意義]

商業地、観光地、居住地として、独自の文化を有する横浜中華街という街が抱える課題は多岐に渡るものであり、多くの他の商店街、観光地、居住地が抱える問題を包含している。

したがって、横浜中華街を対象として、持続可能な街づくりを目指した多面的な「ファンづくり」のあり方を検討し、実証研究を行うことは、地域との連携および領域横断的アプローチによる相乗効果とソーシャル・イノベーション創出の機会となる。加えて、社会課題の解決につながる価値創出の機会として大学と地域、企業との連携体制を構築することを通じ、他の地域・企業に適用可能なフォーマット開発への発展を見据えている。そして、複数の学部からなる総合大学としての地域貢献の特色となる。

7 実施した内容（スケジュールと具体的な活動、実績、成果）

2023 年度に実施した概要とスケジュールは以下の通りである。

- 2023 年 4 月 今年度活動の方向性確認
横浜中華街、およびその他の観光スポットにおける活用可能データの収集（～9 月）
- 5 月 学生協力メンバー確定
横浜中華街フィールドワーク
- 6 月 横浜中華街発展会協同組合との顔合わせ
- 8 月 来街者への街頭インタビュー、およびアンケート実施（再来訪要因調査）
- 9 月 横浜中華街発展会協同組合の組合員事業者の方々へのヒアリング実施（～10 月）
SNS で協力を募り、横浜中華街ファンへのインタビュー実施（～10 月）
街への再来訪要因に関する調査（アンケート）実施（N=436）
- 10 月 横浜中華街発展会協同組合の組合員事業者へのアンケート実施
人流データを用いた横浜中華街およびその他の観光スポット間における人々の移動の
分析（～3 月）
- 11 月 SNS 投稿動画に関する実験調査を実施（N=294）
「第 7 回アグリカルチャーコンペティション 2023 学術的研究分野」に柴田ゼミ生チ
ームが参加し本取り組みについて報告（報告タイトル「横浜中華街における再来訪に
関する研究～マーケティング視点による地域活性化～」）
- 12 月 DeNA と連携したまちあそび人生ゲームの規格と実施（関内エリアについて）
- 1 月 研究活動のまとめと報告会（～3 月）

8 この研究により得られた効果と自己評価

- 横浜中華街に関する消費者調査を実施した結果、再訪したくなる要因（リピート）要因とその改善点をつかむことができた。
- 「また行きたい」気持ちを喚起する上で、SNS 投稿動画は有効であることが確認できた。その際、もともと横浜中華街に行きたいと思っている程度が低い人ほど、SNS 動画によって行きたい気持ちが喚起されることが示された。
- 横浜みなとみらい地区の観光空間について、一程度の人々の流れの傾向を理解することができた。
- 一程度の人々の流れを生むための社会実験を、企業（DeNA）と連携して行い、集客と人々の動きを生み出した。
- 本活動について学生チームがコンテストに参加し、学術的研究分野で最優秀賞を受賞した（第 7 回アグリカルチャーコンペティション 2023 学術的研究分野 柴田ゼミ「笑論包（しょうろんぼう）」最優秀賞を受賞）。
- 2022 年度より本事業で実施している、食べ残しの持ち帰り「打包（ダアパオ）」促進の取組を含む柴田ゼミの食品廃棄物削減や再利用促進等の取組について、令和 5 年度「横浜市食の 3R きら星活動賞」を受賞した。

- 横浜中華街発展会協同組合より「ヨコイチ×横浜中華街プロジェクト」として感謝状を授与された。

9 今後の課題と展開

- 横浜中華街の魅力の本質について、定性・定量の両面からより学術的に掘り下げる必要がある。
- 現在横浜中華街発展会協同組合によって展開されている SNS 等のプロモーションツール自体の効果検証ができるとうい。
- 人流データの精度について課題があり、他社のものと比べた分析を今後行う必要がある。
- 3ゼミの専門的知見を効果的に共有する方法により工夫が必要である。
- 人流データや消費者調査データを具体的なマーケティング戦略に落とし込むための実用性や方法論に課題がある。
- 社会実験と効果検証というスキームを確立する必要がある。

10 本事業に関する研究発表、メディア掲載等

- 第7回アグリカルチャーコンペティション 2023 学術的研究分野 最優秀賞受賞 「横浜市立大学国際商学部柴田典子ゼミ「笑論包（しょうろんぼう）」 | 報告テーマ「横浜中華街における再来訪に関する研究～マーケティング視点による地域活性化～」
 - <https://x.gd/Ldcnz> ※アグリカルチャーコンペティションの HP (URL が長いので短縮しました)
- 国際商学部 柴田ゼミの学生チーム「笑論包」がアグリカルチャーコンペティション 2023 にて最優秀賞を受賞！ | 横浜市立大学公式 WEB サイトに 4 月中旬掲載予定
- 国際商学部 柴田典子ゼミが横浜市資源循環局「横浜市食の 3R きら星活動賞」を受賞！ | 食品廃棄物の発生抑制と再生利用及び啓発等において他の模範となる取組が評価されました！ | 横浜市立大学公式 WEB サイトに 4 月中旬掲載予定
 - 2022 年度より実施している、食べ残しの持ち帰り「打包（ダアパオ）」促進の取組を含むゼミ活動により受賞
- 令和 5 年度横浜市食の 3R きら星活動賞受賞（柴田典子ゼミ）
 - <https://www.city.yokohama.lg.jp/business/bunyabetsu/gomi-recycle/ippan/kirahoshikatsudo/r5kiraboshi.html>
 - <https://www.city.yokohama.lg.jp/business/bunyabetsu/gomi-recycle/ippan/kirahoshikatsudo/r5kiraboshi.files/r5kiraboshi.pdf>
- 横山 暁・有馬貴之・富田裕也（2023）「非対称クラスター分析法を用いた GPS データの分析」『データ分析の理論と応用』 12 (1)、pp. 17-31